

自然と nature  
—中英語 kynde からの—考察—

浅 香 佳 子\*

**Nature and the Japanese Equivalent, Shizen**  
—A Study from the Word ME *kynde*—

Yoshiko Asaka\*

**Abstract**

In the 19<sup>th</sup> century, the English word 'nature' and its Western concept was first equated with the Japanese word 'shizen' and its concept. The difference between the English concept of nature and its Japanese translation, 'shizen' 「自然」 will be pursued. The focus will be on whether or not 'nature' includes human beings and things man-made. In Western thought, especially after the Middle Ages, nature became an object to be observed, controlled and conquered by human beings, while Japanese 'shizen' has been more or less pantheistic, and man is considered as part of it. In order to find differences, 'nature' in the Middle English period (ME *kynde* and ME *nature*) will be explored through the works of Chaucer and Langland.

**キーワード**

自然を表す中世英語 kynde と nature、人間と自然、自然法

**序.**

natureの訳語として初めて「自然」が用いられたのは明治時代だが、その時二つの言葉がもっていた意味が混在して、文芸上の混乱を招いてしまったことはよく知られている<sup>1</sup>。確かに、『広辞苑』の語義においても、日本語伝来の「自然」と、natureの訳語としての「自然」は、意味内容において区別されている。柳父章はこの区別に言及し、その意味上の違いを「人為」と両立するか否かにおいている。

(日本語) 伝来の「自然」は人為と対立し、両立しない。「自然」であるとは、人為的でない、ということである。一方、natureは、人為art, Kunstと対立するが両立する。というよりもたがいに補い合っている<sup>2</sup>。

\*あさか よしこ：大阪国際大学人間科学部助教授〈2004.6.30受理〉

この説明が正しいとすれば、現代日本語「自然」の語義に見られる（１）「山や川、草、木など、人間と人間の手の加わったものを除いた、この世のあらゆるもの」と（２）「人間を含めての天地間の万物。宇宙」（『大辞泉』第一版、下線は筆者）の相違は、日本語伝来の「自然」か、natureの訳語による定義かということになるのではないか。

Natureの訳語として「自然」が成立する以前には、森羅万象を表すのに「造化」が使用されていた。この「造化」は「天地万物を創造し育てる」意味を含み、「万物の生成力」の意味をもつ古代ギリシャのピュシス(Gr.*physis*)や、それがラテン語に訳された*nātūra*の世界に近いと思われる<sup>3</sup>。これら古典古代の自然の概念は、キリスト教が支配的な中世を経て17世紀の科学革命によってうち立てられた自然観、そしてそれへの反動として現れたロマン主義的なそれへと変遷をたどることになるが、本稿ではnatureの意味内容を、ヨーロッパ古典古代の遺産を継承した中英語期に焦点をあてて考察したい。考察対象として、14世紀に書かれたアングロ・サクソンのウィリアム・ラングランドの『農夫ピアズの幻想』(*Piers Plowman*, c.1380年)と、彼と同年代で大陸的なジェフリー・チョーサーの『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*)を初めとする作品群を取り上げ、オックスフォード大英語辞典、中世英語大辞典（以後、OED, MEDと略記）を初めとする各種辞典、それに各種コンコーダンスを用いて、中英語期に「自然」を表したkyndeとnatureの意味内容を分析する。

## I. 「自然」を表す中英語natureとkynde

中英語期に「自然」を表す語にはkyndeとnatureとがあったが、kyndeはゲルマン語を祖先とし、natureはラテン語やフランス語経由で英語に入った語である。OEDによると、natureは14世紀以前には稀にしか見られない。一方のkyndeは、9世紀末のアルフレッド訳『ボエティウス』(*Boethius*)に「自然界」「本性」という意味で用いられて以後、中英語期には多くの語義をもつに至り、盛んに使用されていた。OED、MEDと各種のコンコーダンスから、14世紀後期にはkyndeはnatureとかなり語義の重なる語であり、その後徐々にnatureにとってかわられていったことが分かる。チョーサーはラテン語で書かれたボエティウスの『哲学の慰め』(*De consolatione philosophiae*)を英訳した*Boece*で、事物や人の「本性」の意味のnatureを多く用いているし、また12世紀にフランスの哲学者アラン・ド・リールがラテン語で書いた『自然の嘆き』(*De Planctu Naturae*)の*Nātūra*<sup>4</sup>や、同じ12世紀にギョーム・ド・ロリスとジャン・ド・マンがフランス語で書いた、『ばら物語』(*Le Roman de la Rose*)のNatureをGoddess Natureと英訳して、彼女に生き物の「自然の営み」や「生殖」の意味を与えている。一方「自然界」や「宇宙」という意味では、チョーサーはnatureとkyndeの両方を用いている。しかし、ラングランドは「本性」や「自然界」を表す語としてkyndeしか使用していない<sup>5</sup>。Natureがラテン語*nātūra*に由来するのに対し、kyndeはOE*gēcýnd*の*ge*がとれて中英語となった古英語由来の語である。したがってラテン的、フランス的な前者の文化と異なり、後者のそれはアングロ・サクソンの文化である。チョーサーがnatureとkyndeを用い、ラングランドがkyndeのみを用いたのは、大陸のロ

マンス語系統の詩の影響を濃く受けたチャーサーと、アングロ・サクソン伝来の頭韻詩で書き、文化的にもその範囲内にとどまったラングランドとの違いによる。

さて中英語kyndeだが、MEDのkyndeの項には「事物・人・動物の本性や気質」「外形・体力」「善や美を求める人間の本能」「性・性の営み」「習慣的な所作」「宇宙・被造物・自然現象」「命を生み出す自然・創造者・神」「種・民族」「祖先・子孫」「生まれ（地位・権利・財産）」の語義が記されている。語源辞典によれば、kyndeは血のつながりによる「種（族）」「民族」「子孫」を表す古英語cynn (ModEkin)<sup>6</sup>と祖先を同じくする同族語である。cynnは古くはnātūraと同じく「子孫をもうける、繁栄させる」を意味するインド・ヨーロッパ語のgen-という語幹をもつ語であり、ともに「子孫」や「誕生」を意味するラテン語genusの同族語である。kyndeの語義から古英語cynn系統の意味を除けば、その意味内容は現代英語natureとほぼ重なっている。人間や人為的なものと自然が対立するのは、キリスト教に基づく神—人間—自然という階層的な価値観に基づいて、人間によって利用されるために造られた「自然」の概念のもとにおいてである。そこで、神、人間、自然という三つのカテゴリーに分けてkyndeの意味を整理してみると、1)「命を生み出す自然・創造者・神」2)「人間の本性・気質・所作・体力」や「人間の自然の欲求や本能」3)「宇宙・被造物・自然現象」となる。ラングランドとチャーサーにおいて、1)2)3)はどのような関係にあるかを考察し、kynde(nature)が人間を含むか含まないかを見てみよう。

## II. 『農夫ピアズの幻想』の「自然」Kynde

『農夫ピアズの幻想』では、「自然」を擬人化した人物Kyndeおよび普通名詞kyndeは、万物の創造主である神とその被造物を表わしている<sup>7</sup>。Kyndeを神と等しいとするのは、「自然」を神の下位に位置づけたアラン・ド・リールのNātūra<sup>8</sup>からさらに進んだ概念と見てよい。話の順を追って見てみよう。「どうしたら魂が救われるか」という問いの答えを求めて放浪する主人公ウィルは、夢と覚醒を繰り返しながら様々な抽象的概念の人物に出会う。Bテキスト9章では、「魂の救いに必要な〈善行〉はどこにいるのか」と尋ねるウィルに、〈知性〉が答えて言う。「それはKyndeが四つの元素（空気、水、火、土）で造った人間の内に住んでいるのだ」と。Kyndeはそこに〈霊〉を住ませたとし、〈知性〉は霊肉備えた人間の造り主としてのKyndeの姿を明らかにしている。さらに「kyndeとは何者ぞ」と尋ねたウィルに、彼は「Kyndeとは…あらゆる種の創造者…神である」という答えを返した。

'What kynnes byng is kynde?' quod I. 'Kanstow me telle?'

'Kynde,' quod Wit, 'is creatour of alle kynnes bynges,

Fader and famour of al tat euere was maked—

And tat is *be grete God* þat gynnyng hadde neuere,...

(イタリックは筆者、B.9.25—28)<sup>9</sup>

わたしは尋ねた。「自然はどういうお方なのか、教えていただけますか？」

「自然とは、」と〈知性〉は答えた。「ありとある種の創り主だ、  
創造されたすべてのものに形をあたえた父であり、  
始めを知らぬ偉大な神なのだ。…」<sup>10</sup>

ウィルは夢のなかで〈自然〉Kyndeに連れられて「現世」(Middle Earth)という名の山に行き<sup>11</sup>、その頂上から自然界のパノラマ的光景を見せられた。そこでは、色とりどりの多様な生き物がそれぞれ伴侶(make)と番い、「自然の営み」(a cours of kynde) (B.3.56)によってその種を維持していた。

I seiþ þe sonne and þe see and þe sond after,  
And where þat brides and beestes by hir make þei yeden,  
Wilde wormes in wodes, and wonderful foweles  
Wip fleckede feperes and of fele colours. (B.11.326—29)

わたしは太陽や海、それに砂浜を見たが、  
そこには鳥や獣が伴侶と連れ立って行動を共にしていた。  
森の中では、地を這う虫や、色とりどりの、まだら模様の  
羽をもつ驚くほど見事な鳥を目にした。

11—13章に描かれたミドルアースという名で呼ばれる現世は、Kyndeという神<sup>12</sup>が造った靈妙不可思議な自然の世界であり、その中でKyndeはすべての生き物の「命の源」として愛情を注ぐ「愛」そのものである (Kynde…is loue) (C.10.168—69)。そこでのkyndeは神が人間を含む全存在に与えた「本性」と、性欲を含む「自然本能」の意味に他ならない。

しかし、ミドルアースには、自然な生殖の営みをする生き物とは区別された、疑わしい存在としての人間の姿があった。他の生き物とともに現世にありながらも、人間は「自然の行いをする理性を欠く」という理由で、他の生き物から区別されている (11.369—70)。宇宙の超越的な秩序を意味する〈理性〉とのやりとりの中で、ウィルが「自然界になぜ悪が存在するのか」という問いを發すると、人間はその「本性」(kynde)にしたがうように造られていて、そこから逃れられないのだという説明を返される。万物流転する現象界のなかの人間の定めは無常である。この点は、世の終わりに現れるアンチクリスト軍が人類を襲う最終20章で強調されている。この人類総攻撃の場面を見てみよう。Kyndeは〈病氣〉〈老齡〉〈死〉を引き連れてやってきて、誰彼かまわず大勢の人を殺してしまう。迫り来る〈老齡〉〈死〉を目にしたウィルは、Kyndeに救援の手を差し伸べて欲しいと懇願する。するとKyndeがやってきて、「ただ愛する技術を学べ」とウィルを諭し、彼を美德へと向かわせる。Kyndeはウィルに死は人間に必然であるから、それを「自然」の一つの過程として受け入れるように、自らを自然＝神に委ねる以外に道はないのだから、忍耐し

愛する術を学ぶようにと言う。Kyndeが身をもって示した「死」の必定は、生殖、誕生、繁殖、豊穡といった「成長、生成」とともに、「老齡」「病氣」「死」も「自然」の側面であることを示している。

ラングランドのKyndeやkyndeの思想上の拠り所は一つではない。それは古代ラテン世界の万物を「生み、太らせ、育てる」Nātūraから中世に受け継がれて、さらに前述のアラン・ド・リールによって発展させられた「自然の女神」の世界である。しかしそれは同時にキリスト教の神が創造した世界であり、また神から発するエネルギーで満たされ、万物に神が宿るとする汎神論的なネオ・プラトニズムの宇宙でもある。その宇宙は神と人間と自然が「存在の鎖」で繋がれているのが特徴であり、一方のNātūraの自然界や、キリスト教の神が創造した天地は、あらゆる「種」で充溢しているのが特徴である。14世紀後半にはこれらの自然観がkyndeとnatureに吸収されていた。ミドルアースはその名が示す通り、天と地の間にある「現世」である。それはすべての「種」を含み、万物の生成、成長と腐敗、善と悪のどちらをも含んだ「自然」、Kyndeの世界である。そこにあつては、人間も、道理に外れた人間の行為も、ともに自然の一部として許容されている。

### Ⅲ. チョーサーのkyndeとnature

既に述べたように、チョーサーは「宇宙」「自然界」を表す語としてkyndeとnatureの両方を用いている。下に引用した『誉の館』(*The House of Fame*)の例では、kyndeは「宇宙」を表している。

“O God…that madest *kynde*,  
Shal I noon other weyes dye?…” (イタリックは筆者、584—5行)<sup>13</sup>

「ああ、宇宙を創り給いし神よ…  
わたしは死ぬ以外に道はないのだろうか?…」

『ボエス』(*Boece*)に描かれたチョーサーの「宇宙」(nature)は、『農夫ピアズの幻想』に描かれた人間と同じ四大元素から成り、それらによって繋がれた諸天体をさしている。これは中世に支配的なネオ・プラトニックな宇宙である。それはチョーサーの古典古代の異教世界の宇宙でもあり、そこでは万物が「愛の鎖」(bond of Love)によって繋ぎとめられている<sup>14</sup>。このnatureは不動の動者に始まりをもち、末端にいたって腐敗・壊滅する<sup>15</sup>。

For *nature* hath nat taken his bigynnyng  
Of no partie or cantel of a thyng,  
But of a thyng that parfyt is and stable,  
Descendynge so til it be corrupable.

(イタリックは筆者、「騎士の話」、3007—3010行)

「自然は単に物の一部に始まりをもつのではなくて、不動のものに始まりをもち、末端にいたってはついに朽ちるものであるからだ。」<sup>16</sup>

ネオ・プラトニックな宇宙にあっては、人間は神から連なる「存在の鎖」のなかに存在する。

チョーサーの初期の夢物語詩の一つである『百鳥の集い』(*Parliament of Fowls*)の自然豊かな公園には、薬草やその他の人間に有益な種が多く描かれ(176-82)、人間の目から見た視点が含まれていることが見て取れる<sup>17</sup>。この自然界はアラン・ド・リールの『自然の嘆き』に出てくる自然の女神(Nātūra)が「自然の全階梯」(*scala naturae*)の擬人化人物であるように、あらゆる「種」の充溢を意味し、人間や人為的なものをその一部に含んでいる。自然の女神が支配する、この緑豊かな「自然界」のなかに、時間のない楽園である「囲われし庭」があり、時間に支配された周囲の自然と対照をなしている。この庭のなかにはヴィーナスの館があって、そのなかには魅惑的な実物の女神が裸同然ので寝台の上に身を横たえ、非業の最期を遂げた男女の物語がその壁一面をおおっている。ヴィーナスの館が示すものは、人間の手になる人工的な建物と女性の体の理想的形態であり、「囲われし庭」が示すものは、理想的風景の静止画像である。前者は無常な人間世界の美や愛を、後者は恒常不変の自然界、すなわち楽園を表している。ヴィーナスの館の壁に描かれた、実を結ぶことのない、不毛の男女の愛は、自然の野に繰り広げられる生き物の生殖のための愛と対照をなしているが、ヴィーナスの館が庭のなかにあることが示唆するように、それは「自然」の一樣相として捉えられている。つまりチョーサーの「自然界」は、それが理想化されているにせよ、そうでないにせよ、人間や人為的なものを含めた「自然」である。人間はその生殖活動のあり様において、他の生き物と区別はされているが、やはり「自然」(Nātūra)の一部である。

チョーサーは『百鳥の集い』で用いた自然の女神の典拠である、*De Planctu Naturae* (『自然の嘆き』)を *Plaint of Kynde* と訳しているが(下線、筆者)、このKyndeは「人間や動植物に共通に備わった自然本能」、とりわけ「生殖」(MED、5a)を意味し、その象徴として彼女はあらゆる種類の鳥たちに生殖愛を促す。この意味のkynde、とりわけ鳥獣類の自然の営みの世界は、フランスのファブリオーの文学ジャンルを真似て作られた一連の卑猥な作品群に舞台を提供している。例えば『カンタベリー物語』の一つである「粉屋の話」(*Miller's Tale*)では、二人の好色な男が老大工の美人の女房に情欲をいだき思いを遂げようとするのだが、その仕様は動物的本能に基づいていて、いかにも下品である。若い男二人を動かしているのは、動物に本能として備わっている性欲である。この意味でのkyndeにおいても、人間は他の動物から区別されていない。

以上見てきたように、チョーサーのnatureやkyndeはボエティウスに影響された「宇宙」であり、また同時にラテン世界のNātūraの「自然」である。ネオ・プラトニックなボエティウスの宇宙の諸天体の一つである地球には、人間を初めとする諸生物が「存在の鎖」のなかに生息し、Nātūraの自然界にはあらゆる「種」が充満している。どちらにおいても、人間は自然から切り離されていない。

#### IV. natural lawと人間

日本語「自然法」は、

人間の自然の本性あるいは理性に基づいて、あらゆる時代を通じて普遍的に守られるべき不変の法として、実定法を超越しているものと考えられる法<sup>18</sup>

と定義されているが、これはnatural lawの輸入によるものである。現代英語natural lawとは、人為的につくりだされた「実定法」に対し、自然の秩序のことであり、自然界の法則および人間の社会法則を含むものである<sup>19</sup>。この定義づけは、古代ローマ時代の「自然法」(*ius naturale*)に遡り<sup>20</sup>、それが中英語期にはlaw of kyndeと表されて、一方で「自然界を支配する諸法則」(MED,7c)となり、もう一方で「自然や理性に基づいて、社会のなかで倫理的な拘束力をもつ法」(MED,5b)となり、それぞれ現代英語のthe laws of natureとnatural lawとなった。「自然の掟」の訳語で知られる中英語期のlaw of kyndeは、トマス・アクィナス(Thomas Aquinas)に代表されるカトリック神学と結びついて、絶対的な正義と考えられていた<sup>21</sup>。人間がもつ理性は神から分与されたものにすぎず、その理性と自然の掟に基づくことによって、人間は神の永久法に与かることが許されると考えられていた。『農夫ピアズの幻想』では、人間の「理性」は「自然の掟」と神の理性の支配を受けている。次の例では、〈霊〉は「キリストならいざ知らず、人間がすべてを知ろうなどは…天地の理性に反する」ことだと言う。

'It were *ayeins kynde*,... and alle *kynnes reson*'

That any creature sholde konne al, except Crist oone. (イタリックは筆者、B.15.52-53)

ラングランドはlaw of kyndeを、Bテキストで2回、Cテキストで4回使用し、またチャーサーは全テキスト中で2回このフレーズを使用している。いずれの場合にも、上に挙げたnatural moral lawを表している。law of natureのOEDの定義は、「自然によって人間の精神に植えつけられ、理性によってその力を示す法」<sup>22</sup>であるから、それは宇宙・自然界と人間の肉体と心とともに支配する「理性」ということができるだろう。ミクロコスモスである人間は、マクロコスモスである宇宙・自然界の秩序に一致し、それに支配されているのだ。ラングランドはlaw of Nature (Kynde)の概念を、当時よく読まれていたローマのジャイルズ(Giles of Rome)の『君主統治論』(*De Regimine Principum*) (c.1277-79)や、や前述のトマス・アクィナスの『君主統治論』(*De Regimine Principum*) (1266-)から得たとされている。彼らは自然界の神的秩序に人間が倣うべき範を見てとり、それを君主が国を治める術とした。『農夫ピアズの幻想』の系譜と言われる『黙する者と真実を話す者』(*Mum and the Sothsegger*, c.1409)では、花咲き乱れ、穀物豊かに実り、動物満ち溢れた自然界(877-943)を見て、詩の語り手は言う。

A swete sight for souurrayns, so me God help. (931)

「君主にとっては美しい光景、神よ照覧あれ。」<sup>23</sup>

チャーサーの最初の夢物語詩『公爵夫人の書』(*Book of the Duchess*)のlaw of kynde(56)もまた、人類の曙の「黄金の時代」に、誰からも強制されることなくして、自然に守られていた道徳秩序をさしている。

次に「自然法」(law of kynde)の意味をもつkyndeを形容詞として冠した語句を見てみよう。『農夫ピアズの幻想』Bテキストでは、kynde witが25回、kynde knowingが6回使われている。kynde witは推理や考察によらない「直感的な知性」であり、kynde knowingは「直観的な理解力」、すなわち直覚的に物事の本質をさとする力を意味する<sup>24</sup>。kynde witは14世紀には、社会の「公の利益」(common good)を守り、共同体を維持するのにとりわけ必要な要素と考えられていた。このことは、ピアズが幻想に描いた国の政治的コミュニティで、kynde witが占める重要な位置からも推測される。プロローグに描かれたその場面では、国王、騎士、聖職者の三階級に仕える庶民と、その下の存在で、すべての人に奉仕する農民から成る王国が出来上がった。そこで著者は語り手を通して、国王に助言を与える識者を育成するのにKynde Witが大切だと主張している。

And þanne cam Kynde Wit and clerkes he made,

For to couseillen þe Kyng and te Commune saue. (プロローグ、114-15)

そこへ〈理知〉がやって来たが、彼は学者を育てて  
国王へ助言し庶民を弁護するのだ。

## 結び

以上の考察内容から、チャーサーとラングランドのkyndeやnature、それにlaw of Nature(Kynde)によってあらわされる意味内容において、人間はkyndeの支配をうけ、その一部としてそれに関わりをもつととらえられていたことが理解される。natureの語源を14世紀のチャーサーやラングランドに遡ってみた時、人間に有益となるように利用されるnatureの概念はあっても、柳父の指摘通り、それは人為と両立し補い合う関係であった。現代英語natureには、preserve the nature「(人間が)自然を保護する」a struggle against nature「(人間と)自然との闘い」のように、人間と自然に主体対客体という支配の構図が明白に見て取れる表現もあるが、キリスト教以外にもNätûraや汎神論的なネオ・プラトニズムの自然界などの、諸概念が吸収されていた中英語Kynde、kynde、natureの世界では、人間は自然と対立しても、両立し補い合って全体を成す世界であった。

本稿は、2004年6月に出版した「自然とnature—中英語kyndeからの—考察」(『英語表現研究』第21号、日本英語表現学会)の内容に補足説明を加えたものである。



注

- <sup>1</sup> 柳父章『翻訳の思想—「自然」とNATURE』(平凡社、1977)と『翻訳語成立事情』(岩波書店、1982), pp.127-48を参照。
- <sup>2</sup> 柳父章『翻訳語成立事情』(岩波新書、1982), p.133.
- <sup>3</sup> ギリシャ語の*physis*がラテン語訳されて*nātūra*となり、それが*nature*となった経緯は、伊東俊太郎『自然』(三省堂、1999)pp.9-29に詳しい。*physis*の意味は同書、pp.9-18に拠っている。ラテン世界の*nātūra*の意味は、E.R.Curtius, *European Literature and the Latin Middle Ages*, trans. W.R.Trask (London: Routledge & Kegan Paul, 1953), pp. 106-13. 日本の「造化」がローマ世界の*nātūra*に近いことは栗田勇も指摘している。『雪月花の心』(祥伝社、1987), p. 30.
- <sup>4</sup> ChaucerはAlainの*Nātūra*を*Goddess Nature*と英訳しているが、その作品名の*De Planctu Naturae*の*Nātūra*は*Kynde*と訳して、*Plaint of Kynde*としている。
- <sup>5</sup> 保永美和子「自然を表す*kynde*の意味について」*Studies in Medieval English Language and Literature*, 18号(2003), p. 87.
- <sup>6</sup> *OED*および*The Barnhart Dictionary of Etymology*を参照。また、Old EnglishはOE、Middle EnglishはME、Modern EnglishはModEと略記した。
- <sup>7</sup> Economouはこの二つの概念上の区別を明確にするために、神の概念を*Kind*、現象世界を*Nature*と現代英語訳している。G Economou, trans., *William Langland's Piers Plowman: the C version: a verse translation* (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1996), p.259.
- <sup>8</sup> Alainの*Nātūra*は神の命を受けて、宇宙の調和と秩序を維持する役割と、種の豊饒さとその保存を司る神の副代理人である。
- <sup>9</sup> 本稿では*Piers Plowman*のBテキストを基本とし、Cテキストは補足的に使用した。A.V. C. Schmidt ed., *Piers Plowman: A Parallel-Text Edition of the A, B, C And Z Versions* (London and New York: Longman, 1995)
- <sup>10</sup> 中英語テキストの翻訳はすべて筆者による。
- <sup>11</sup> C.13.134 ff Cテキスト13章では「現世」という鏡の中を見せた。
- <sup>12</sup> 'kynde' MED, 8(c)
- <sup>13</sup> チョーサーからの引用はすべてJ. H. Fisher ed. 1989. *Complete Poetry and Prose of Geoffrey Chaucer*. 2nd edition (New York: Harcourt Brace College Publishers)に拠る。
- <sup>14</sup> 『トロイラスとクリセイデ』(*Troilus and Criseyde*)、Ⅲ、1765-67行を参照。
- <sup>15</sup> ネオプラトニズムの宇宙には、すべての源泉となる第一原因の始動者(=神)—知性—靈魂—自然—元素—地上の存在(人間・動物・植物・鉱物)という存在の連鎖がある。
- <sup>16</sup> 梶井迪夫訳『カンタベリー物語』(岩波文庫、1995年)の訳を使用した。
- <sup>17</sup> 「利用される自然」については、松田隆美「所有される自然—ヨーロッパ中世文学の自然・環境・風景」『自然と文学』(慶応義塾大学出版会、2001年)に詳しい。
- <sup>18</sup> 『大辞泉』を参照。
- <sup>19</sup> 『リーダーズ英和』第一版(1984、研究社)を参照。
- <sup>20</sup> *Medieval Political Theory: A Reader: The Quest for the Body Politic*, ed. Cary J. Nederman and Kate Langdon Forhan (London and New York: Routledge, 1993).
- <sup>21</sup> *Selected Political Writings*, ed. A.P.D'Entrèves (Oxford, 1948), Thomas Aquinas, *Summa Theologica*, Quaestio XCI. Art. 2を参照。
- <sup>22</sup> *OED*, 'law' の項9c' as capable of being demonstrated by reason'を参照。
- <sup>23</sup> Day, Mabel and R.Steel, ed. *Mum and the Sothsegger* (1936; rpt.1971. EETS)を参照。
- <sup>24</sup> *kynde wit, kynde knowing*は、Derek Pearsall ed., *Piers Plowman by William Langland: An Edition of the C-text* (Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, 1978), p. 37, 50; A.V.C.Schmidt ed. *The Vision of Piers Plowman: A Critical Edition of the B-Text Based on Trinity Colleges MS B. 15.17* (Everyman, 1978), p.412, 414; G. Economou, pp.223-24の定義を参考に導き出した。